

# 国内外経済の動向

## コロナ禍におけるアセアン主要国の経済回復の動向

### 【ポイント】

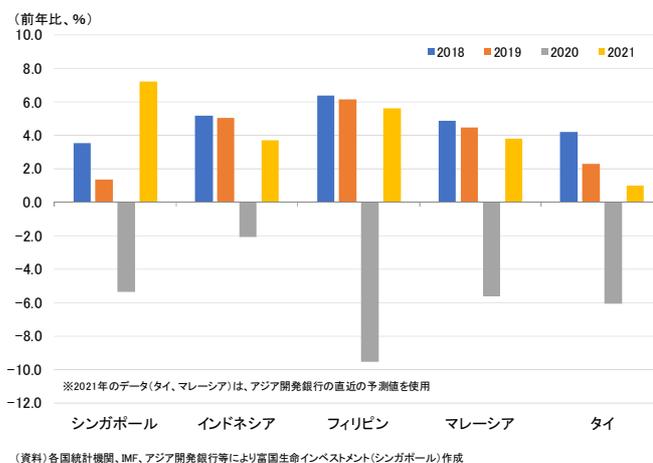
1. アセアン主要国の経済回復の動きをみると、シンガポールはいち早く回復したが、国によって回復の足取りは異なっている。
2. その動きは新型コロナウイルスの感染拡大状況とワクチン接種の進捗具合に大きく影響を受けたとみられる。
3. アセアン主要国の産業構造は国によってそれぞれ違うことから、コロナ感染拡大がGDPに及ぼした影響も国ごとに異なっている。
4. 2022年以降、ワクチン接種が進展するなか、政府の規制が緩和される方向になると見込まれ、経済活動は基調としては上向きの動きになるだろう。

東南アジア諸国連合（以下、アセアン）において、2020年1月にシンガポールやタイなどで新型コロナウイルスが確認され、いわゆるコロナ禍となってから2年以上が経過した。総じてみると、当初、未知のウイルスの感染拡大に対して社会、経済活動を極端に抑制する政策をとったものの、2021年半ば以降はワクチン接種の進展等もあってコロナとの共存を目指す政策へと徐々に変化していったと言えよう。コロナ禍が完全に収束する時期は現時点では見通せないが、2年が経過したタイミングでアセアン主要国（シンガポール、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン）の2021年以降の経済動向を大局的に整理し、2022年の動向を考察したい。

### 1. アセアン主要国において国ごとに異なる経済回復の足取り

まずアセアン主要国の暦年ベースの実質GDP成長率<sup>1</sup>の推移を確認したい（図表1）。すべての国で2021年はプラス成長に戻る、もしくはその見通しとなっているが、伸び率は国ごとに大きく異なっている。この5カ国の中で唯一の先進国であるシンガポールは、2021年が前年比+7.2%と2020年の同▲5.4%のマイナス幅を上回り、最も高い成長率となった。新興国である他の4カ国は潜在成長率が高く高成長が期待できるはずだが、2020年の大幅なマイナス成長の後でも、コロナ禍前の2019年の伸びを下回る結果、もしくは下回る見通しである。もっともインドネシアは2021年が同+3.7%と2020年の同▲2.1%のマイナス分を取り戻して暦年ベースで2019年のGDP水準を回復した。

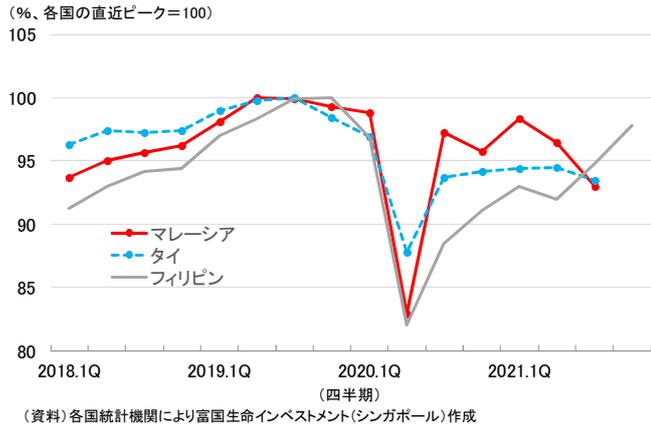
図表1. 実質GDP成長率の推移



<sup>1</sup> マレーシア、タイは10~12月期のGDPが執筆時点で公表されていないため、アジア開発銀行の予測値(2021年12月)を使用。なお、1~9月期ではマレーシアが前年比+3.0%、タイが同+1.3%である。

暦年の実質 GDP の水準がコロナ禍前を回復していない他の3カ国について四半期の推移(季節調整値)を確認すると(図表2)、フィリピンは、足元でも依然として直近ピークの水準を下回り、マレーシア、タイは7~9月期時点で直近ピークを約7%下回る水準にとどまるため、10~12月期にプラス成長となっても直近ピークを上回る可能性は低いだろう。シンガポール等は暦年ベースでもコロナ禍前の水準を回復する一方、瞬間風速(四半期ベース)でも回復できていない国があるなど、主要5カ国の経済回復の足取りが異なっている。これは新型コロナウイルスの感染拡大とそれに対する規制や各国の産業構造の違いが影響したとみられる。

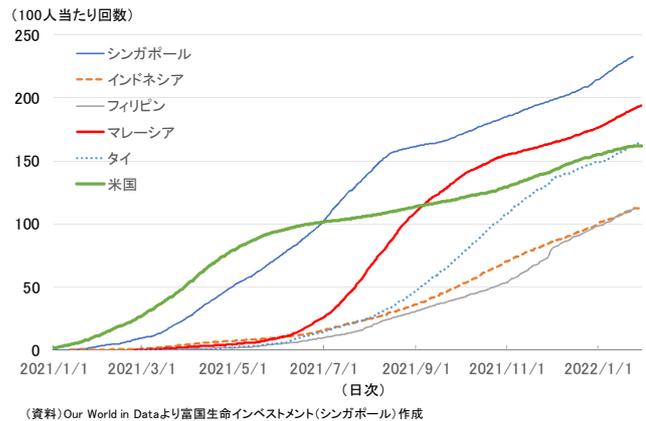
図表2. 3カ国の実質 GDP の水準



## 2. シンガポール以外はワクチン接種の遅れが経済回復の足かせに

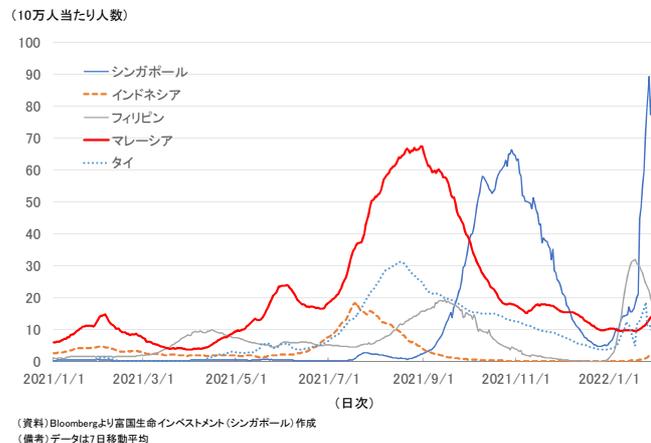
2021年のアセアン主要国の経済活動は新型コロナウイルスの感染拡大状況とワクチン接種の進捗具合に大きく影響を受けたとみられる。図表3は、100人当たりのワクチン接種回数の推移を示している。アセアン主要国は、ワクチン開発国である米国に比べて接種が遅れており、直近では極めて高い接種回数となっているシンガポールも2021年前半は米国を下回っていた。

図表3. ワクチン接種回数の推移



そのシンガポールと他の4カ国の接種回数について、100人当たり回数が100回を上回った時期で比較すると、シンガポールは6月下旬に達したものの、マレーシアはそのおよそ2ヵ月後、タイが4ヵ月後、インドネシア、フィリピンは半年遅れの2022年1月にその水準に届いたところである。ワクチン接種による感染予防効果や重症化率の低減が期待できる環境になるのが遅れたことで、アセアン主要国はシンガポールを除くとコロナとの共存を目指すのが困難な状況であったと言えよう。

図表4. 新規感染者数の推移



このような接種状況のなか、政府の規制に影響を与える新規感染者数はどのように推移したのか確認したい。人口が5百万人ほどのシンガポールと2.7億人のインドネシア等を比較するため10万人当たりの人数で推移をみると(図表4)、それぞれの国で数回感染拡大の波が発生した。その都度、各国で行動制限等の規制が課さ

れ、経済活動を下押しする要因となった。特にデルタ株が主流となり、年半ばくらいから感染者が急増した局面では、ワクチン接種が遅れる中で各国が厳しめな規制を行ったことから、経済活動の回復の動きが足踏みすることになった。中でもマレーシアは6月からロックダウンに近い厳しい規制が導入された影響もあり、2021年7~9月期の実質GDPが前年比マイナスに落ち込んだ。一方で、足元で最も10万人当たりの新規感染者が多いシンガポールについては、10月以降感染者が急増したものの、高いワクチン接種率を背景にコロナとの共存を目指し一部規制（原則在宅勤務、レストランでの人数制限等）にとどめたため、経済活動への影響は軽微にとどまっている。

### 3. 産業構造の違いによってコロナ感染拡大の影響にも相違が

アセアン主要国は産業構造が違うことからコロナ感染拡大がGDPへ及ぼした影響は国ごとに異なっている。まず産業構造の特徴を整理するため、名目GDPの産業別の割合を確認したい（図表5）。コロナ禍前の2019年のデータをみると、先進国であるシンガポール以外の国は第1次産業と第2次産業の割合が高く、とりわけ第1次産業の割合が高いインドネシアは両産業の合計が5割を上回り、他の3カ国も4割前後となっている。一方、アジアの金融ハブを目指すシンガポールは金融保険の割合が高いなど、サービス業中心の産業構造となっている。ただし、第2次産業に該当する製造業は、アセアン主要国は世界の輸出拠点でもあることから、シンガポールを含めて高い割合となっている。最も高いタイがGDP比でおよそ4分の1を占め、他の国も軒並み20%前後となっている。

図表5. 名目GDPに占める産業別割合の推移

(%)

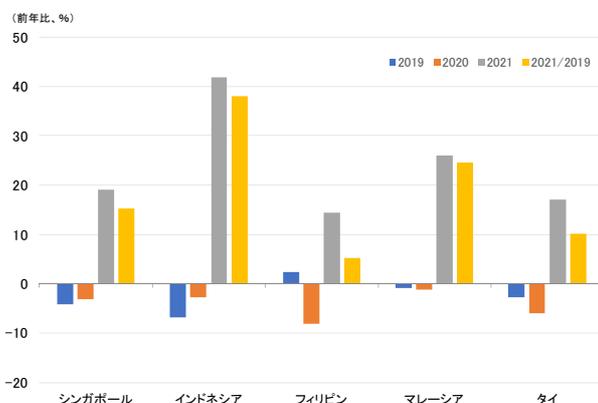
	シンガポール			マレーシア			インドネシア			タイ			フィリピン		
	2019	2021	差	2019	2021	差	2019	2021	差	2019	2021	差	2019	2021	差
鉱業等	-	-	-	8.7	8.0	-0.67	7.3	9.0	1.72	2.4	2.2	-0.20	0.8	0.9	0.10
農業等	-	-	-	7.2	9.4	2.18	12.7	13.3	0.57	8.1	8.4	0.26	8.8	10.1	1.26
製造業	19.5	21.5	2.03	21.4	23.4	1.96	19.7	19.3	-0.45	25.6	26.5	0.82	18.5	17.7	-0.85
建設業	3.6	2.9	-0.72	4.7	3.7	-0.97	10.7	10.4	-0.31	2.5	3.0	0.49	7.9	6.9	-0.96
ガス水道等	1.1	1.1	-0.02	2.7	2.7	0.02	1.2	1.2	-0.05	2.6	2.6	-0.02	3.1	3.4	0.24
卸小売	16.9	17.2	0.38	15.1	14.5	-0.58	13.0	13.0	-0.05	16.2	16.2	-0.08	18.0	18.1	0.10
宿泊飲食サービス	2.0	1.2	-0.74	3.8	2.6	-1.18	2.8	2.4	-0.35	6.1	3.3	-2.78	2.2	1.5	-0.73
運輸倉庫	6.2	5.2	-1.04	3.8	3.0	-0.81	5.6	4.2	-1.33	5.8	4.7	-1.17	3.9	3.1	-0.78
情報通信	4.4	4.9	0.51	5.7	6.4	0.77	4.0	4.4	0.45	-	-	-	2.9	3.3	0.41
金融保険	13.3	14.6	1.23	6.3	7.2	0.88	4.2	4.3	0.10	7.5	8.6	1.04	8.6	10.1	1.48
上記以外	33.0	31.4	-1.63	20.7	19.1	-1.59	18.8	18.5	-0.30	23.0	24.6	1.64	25.2	25.0	-0.27

(資料) 各国統計機関より富国生命インベストメント(シンガポール)作成

(備考) 2021年のデータはフィリピン、インドネシア以外は1~9月期、網掛けは2021年と2019年との差が1.0%以上変動した項目

その製造業について、コロナ禍でどう変化したのか2019年と2021年を比較して確認したい。コロナ感染拡大に伴う工場稼働の制約やサプライチェーンの混乱などが下押し要因となったが、堅調な輸出が製造業をけん引したとみられる。2021年の輸出金額は、中国や米国などの先進国の財消費の拡大を背景に増加傾向となり、すべての国において2019年対比で増加している（図表6）。インドネシアが38%増と大幅増となった他、マレーシアが25%増、シンガポールが15%増と二桁増となった。こうした輸出の増加を映してシンガポールやマレーシアなどでは製造

図表6. 輸出金額の増減率の推移



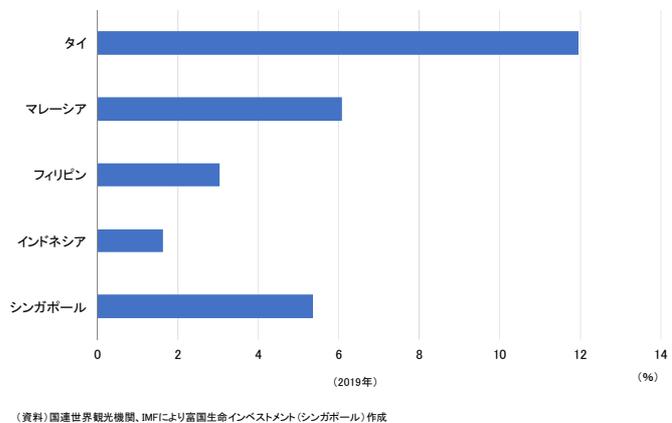
(資料) 各国統計機関により富国生命インベストメント(シンガポール)作成

業のウエイトが高まっている。反対に輸出が大幅増となったインドネシアは製造業のウエイトが低下したが、それは輸出増の要因が資源価格の高騰によるためである。資源国であるインドネシアは、資源輸出の増加により鉱業の割合が高まることになり、経済回復の動きをサポートしたと考えられる。

コロナ禍前と比較して2021年のGDPに占める割合が上昇した産業は、国ごとに多少バラツキはあるものの、総じて言えば、感染リスクが低い農業、外需の依存度が高い製造業、アセアンにおいて重要な産業である金融保険や情報通信であった。

一方、産業別の割合がすべてのアセアン主要国で低下したのが、コロナの影響を大きく受けた宿泊飲食サービス、運輸倉庫である。感染拡大局面では飲食店での食事制限、出社制限、域外地域への移動制限等の規制が課せられたため、国内要因でもこの産業は大きく落ち込むことになった。加えて、アセアン主要国の多くは観光産業に依存していることも大きく影響した。2019年の国際観光収入額（国連世界観光機関公表）を用いて名目GDP比を試算すると（図表7）、インドネシアは1.6%、フィリピンが3.0%と低い一方で、シンガポールは5.4%、マレーシアが6.1%とある程度高く、とりわけタイは12.0%と海外からの観光客に大きく依存している。それにより海外からの観光客が激減したタイは宿泊飲食サービスと運輸倉庫の割合が2019年の11.9%から2021年には8.0%と4ポイント近く低下した。この観光産業への依存度の高さも経済回復の動きが相対的に遅れた要因であろう。

図表7. 国際観光収入額の名目GDP比



#### 4. まとめ

2021年の各国の経済動向を整理すると、シンガポールは年前半の新規感染者数が少なく、それが増加した10月以降は既にワクチン接種率が高くコロナとの共存を目指したことや外需の堅調がいち早く経済が回復する要因となった。インドネシアは、夏頃に医療崩壊が起きるなど感染拡大が深刻化したが、コロナの影響を受けにくい第1次産業の割合が高く、特に資源価格の高騰が追い風となった。一方で、フィリピンは、輸出の伸び悩みに加えて、ワクチン接種が遅れるなかで首都圏を中心に規制が長期化したことが響いた。マレーシアは、輸出は堅調であったものの、新規感染者や死亡者数が域内では相対的に多く厳しい規制を課したため年半ばを中心に経済活動が停滞した。タイは、自動車産業における部品不足に加えて、観光産業への依存度の高さが重しとなった。

2022年以降、アセアン主要国がコロナとの共存を図る政策を維持できるか不透明な点は残るものの、オミクロン株はこれまでの変異株より重症化率が低いことやインドネシア、フィリピンにおいてもワクチン接種率が徐々に高まっていることから、2021年に比べて各国政府が厳しい規制を敷く可能性は低く、コロナとの共存を目指すだろう。観光産業の完全回復は当面見込めないが、既に幾つかの国では、地域を限定しながら隔離期間なしの渡航者を受け入れるなどの動きもみられる。感染動向次第では紆余曲折もあるだろうが、アセアン主要国はコロナ禍を起因とする下押し要因からのキャッチアップの段階にあることから、基調としては経済活動は上向きの動きが続くと見込まれる。

(富国生命インベストメント (シンガポール) 森実 潤也)